

暮らして「家」と言われるのだというのです。「まんまんさんに参ろうや」と言う年寄りの声で一日が始まり一日が終わりました。そこで自然にものいのちの尊さや、生かされているおかげを知らされ、人の気持ちをお大切にすることをつけられたのです。いまは核家族化されて、こういう雰囲気は殆どなくなつてしまいました。けれども冒頭に書きましたように、よきご縁が加われば、先祖伝来の宗教心が復活すると思えます。ありがとう、おかげさま、もつたいない、ようこそようこそ、こういった受身表現が自然と身に付き、口をついて出るような日暮しを復活させたいですね。

子育てサポート 視点を変えて、 家庭でいのちの教育を

佐藤 園江
(西教寺仏婦会会長)



一、個人差が大きい

このところ、人のいのちに関わる犯罪の低年齢化に伴い小中学生に対する「いのちの教育」の大切さが改めて問われるようになってきました。学校・家庭・地域社会が力を合わせて取り組ましようと呼び声も高く、それはそれで意義のあることだと思えます。

一方、長年小学校教

育に携わってきた私は、

学校に於ける集団教育

の場で「いのちの教育」

を進めることの限界と

むずかしさを感じてお

りました。それは、いの

ちに関わる一人ひとり

の子どもの体験には個

人差があり、しかもそ

れがかなり大きいとい

うこと、家族によつて死

生観が異なり、いのちの

終末、人間の死のとな

え方にも大きな差があ

るということからでし

た。このたび視点を変え

て「子育て」を考える機

会を与えていただきま

したので、家族の中です

すめる子育てを「いのち

の教育」に視点をあてて

考えてみたいと思いま

す。

二、母の亡い子二人の想い

●「先生、ぼくね、一回もお母さんから怒られたことがないんですよ。一回でもええ、怒ってもらいたかった。」

二年生を担任していた秋の日の放課後、教室に残っていたN君が私の

傍に来てぼつんとつぶやきました。

N君の母親は保育所

時代に病死され、同居

中の祖母が母親代わり

をして育てておられま

した。明るくて健康その

もの、いつもは快活に見

えたN君がとても淋し

そうな表情をしていま

した。家族の方はお母

さんの死をどのように

受け止め、N君にはどの

ように話しておられる

のだろうかと気にかかり

ました。

ました。

「お兄ちゃんは、よう怒

られたんですよ。硬筆の宿

題なんか泣きながら書

きよつたの、ぼく覚えと

るんですよ。」

安易な慰めの言葉を

かけることなどでき

ず、ただただ聞き役にま

わるだけでした。

●もう一人忘れることのできないのがAさんです。

Aさんは、八才の時に

母親が病死され、二人

の弟さんと一緒にやは

り祖母に育ててもらっ

ていました。母親が亡く

なられた時乳児だった

という下の弟さんは幼

稚園児になっておられ

ました。

卒業式直前のこと、A

さんと仲良しだった級

友のお母さんが亡くな



念仏者九条の会編

リット 『仏教と憲法九条』

先の戦争で、私たち教団は戦争協力をしました。その是非は色々あるでしょうが、六十年後の今、私たちはど

ちらに進むか、慎重に考えたいと思

います。一冊二百

円。お寺にありま

す。